歴史地理学　61－1（291）1-3　2019. 1

シンポジウム趣旨説明

「海からの歴史地理」研究の課題

河　原　典　史

1．はじめに

日本は海に囲まれた島国であり，その歴史は海からの影響を強く受けてきた。海は交通の障壁となる一方で，国内外の人々や物の移動の交通路として機能し，それらの交流の重要な媒体となってきた。また，海は生業の場として人々に水産物の恵みをもたらす反面，津波や高潮などの災いをおよぼす存在でもあった。これらの過去の海と人々との関わりの実態を解明することは，そのこと自体の意義にとどまらず，これまでに蓄積されてきた「陸地の」歴史地理学の成果を捉え直す契機にもなるであろう。さらに，地図に描かれた海に対する人々の認識，逆に海からみた陸地のイメージなど，歴史地理学においては興味深く，かつ重要な課題も少なくない。このような海と人々との多様な関わりについて，国際交流の歴史を含めた歴史地理学の観点から多角的な議論を喚起したい。

2．「海の歴史地理」からの脱却

上記の趣旨に至る研究の潮流を概観してみよう。いまから約40年前，歴史地理学会は『歴史地理学紀要』13巻（1971）に「特集：海洋・海岸の歴史地理」を編集・発行している。それには，巻頭の序に続く特集論文の9本と自由論題の3本の論文が収められている。

序　山口平四郎
海洋の歴史地理　川上　健三
能登半島の海と人　矢ケ崎孝雄
漁業集落における共同体的結合の地縁的基礎について　小栗　宏
大村湾の真珠養殖業―採貝採藻漁村と浅海養殖漁村　大島　襄二
19世紀を中心としたフランス漁民の新大陸タラ通漁　島田　正彦
水産物消費市場の流通形態の変化と産地市場　―山陰地方の場合　田中豊治
大正における朝鮮産米の海上輸送と釜山―日鮮貿易の一断章　樋口節夫
野蒜築港と新市街地の景観　田村勝正
江戸の埋立地造成と木場の移転　小沢利雄

この論文集をおおまかに類型化すると，海洋の制度をめぐる概説的な論文：1本に続き，漁村・漁業・流通・港湾に関する論文が各2本ずつになる。

序を記した山口平四郎は，「十五世紀に始まる大航海時代は，人間と海洋との関係に革命的な変化をもたらした。かつて陸と陸とを隔てた海は，いまや陸と陸とを結ぶ終になった。世界各地の聞の貿易や交通，文化や民族の交流，政治力の作用と反作用，それらは海洋を通して年ごとに強く盛んになっていく。そこに，多方面にわたる歴史地理の課題がある。とりわけ国土の四面に海をめぐらしたわが国においては，海洋の地理的な研究がもっと積極的であってよさそうに思われる。」と記している。ここでは，境界としてだけでなく，海洋をさまざまな現象の交流を促す媒介

として捉える必要性が述べられ，そこに歴史地理学研究の課題が見出されている。そして，「海が重要な研究であるからといって，海洋と陸地とを，あれかこれかという二者択一的な形で問題にすることは，歴史地理的に適切な姿勢ではあるまい。」と続けた著者は，さらに「人間の営みの空間的な軌跡を歴史地理的に取り上げる場合に，その海上の分だけを切り離して論じ難いことは明らかであろう。」と続けている。また，この特集で「海洋の歴史地理」を論じた川上健三は，その冒頭で「海洋の歴史地理としては，これまで主として探検地理とか交通地理とかの観点から取扱われ，これについては多くのすぐれた研究がある」と記している。ここだけを切り取って論じることはやや早急であるが，当時の海洋に関する歴史地理学研究が，新たな方向性を見出しつつあったと思われる。つまり，生産・流通の場となる海洋と，おもに生活の場となる陸上とを相互に検討する歴史地理学のアプローチが萌芽し，成長を続けていたのであろう。

3．「海からの歴史地理」への発展

このような研究史をふまえ，本共同課題では4つのセッションを設けた。第1セッションは「近世～近代における漁場利用の変化と人々の移動」とし，漁業・漁村の歴史地理学を検討する。農業と異なり，生産の場となる漁場は海面・海中・海底と立体的に捉える必要がある。それは魚種によって変化，さらに時代を経て，時には季節によっては漁場そのものが移動する。それにともなって漁業者が移動することは，決して稀有ではない。さらに，漁獲後の加工・保存などに関わって，陸上の利用形態も複雑に関わっている。

末田智樹（中部大）報告では，近世西日本近海における鯨組の出漁と漁場利用の変化が論じられる。そして服部亜由未（愛知県立大）報告では，東北～北海道におけるニシン漁を事例に，浮魚資源の変動にともなう漁業従事者の移動について考察された。そして，文献史学から漁場利用を考察する東幸代氏（滋賀県立大）のコメントは歴史地理学への橋渡しになる。

第2セッション「近世～近代における海運とその変化」は，漁場だけでない海洋の持つ特徴的は空間利用を考える。海洋は陸地を隔てる閉じた空間ではなく，特には陸地と陸地を結節する開かれた空間にもある。とりわけ，近世から近代初期にかけて日本海沿岸では，海上交通の果たした役割は極めて大きい。また，日本海を挟んだ大陸との交流も決して看過できない。

阿部志朗（益田翔陽高）報告では，近世～近代に生産された石見地方の窯業製品の分布からみた日本海海運が論じられた。また，三木理史（奈良大）報告では，海からみた近代東北地方の港湾と鉄道を検検することから『裏日本』論と東北論が再考された。そして，港湾や海上交通をめぐる歴史地理学研究を重ねてきた南出眞助氏（追手門学院大）のコメントが収められている。

第3セッション「津波被災史研究と防災・減災への活用」は，意欲的なテーマである。海洋は魚介類をはじめ，多くの富を人間に提供する。しかし，時には災害をもたらす畏怖の存在にも変わる。東日本大震災の記憶が新しいなか，津波による被災，それを免れた地域・人々の記録・記憶を後世にいかに伝えるか，防災・減災をめぐる歴史地理学の果たす役割について考える。

鎌滝孝信（秋田大）報告では，北東北日本海沿岸域における津波堆積物研究から推定される津波履歴が地形学の立場から論じられる。林紀代美（金沢大）報告では，漁業地域での津波に関する防災活動・学びの展開と課題について地理学から貢献を検討している。自然地理学の青木賢人氏（金沢大）による実践的研究からのコメントも極めて有益である。

最後の第４セッション「近世～近代における海浜の活用」においては，魚介類や製塩以外の資源についてアプローチする。１つは鉱産資源であり，もう１つは観光・レクリェーション資源である。前者は第２セッションとも関わり，近代初期における日本海側の優位性について議論する視点にもなる。後者は，『歴史地理学紀要』13巻では取り上げられなかった古くて新しいテーマである。魚介類や製塩以外の資源についてアプローチを試みる橋村修（東京学芸大）報告は，近世以降の海浜の多用な利用について遊漁や名所をめぐる歴史展開を紹介する。品田光春（日本大・非）報告からは，近代日本の油田開発における海浜・海底の検討が行われる。そして，経済地理学の視点から磯部作氏（放送大・客員）が現在へつながる開発のあり方についてコメントを行っている。

４．「海からの歴史地理」への発展

以上の４セッションについて，歴史地理学だけでなく，歴史学・地形学・自然地理学・経済地理学などの隣接科学の議論から，これからの海洋をめぐる歴史地理学のテーマ・アプローチについて議論を重ねたい。その成果をまさに大会が開催される秋田「から」発信したい。辞書によればこの「から」には，“出発する位置を表す”だけでなく，“通過する位置や範囲”を表すこともある。さらに，“理由・原因・動機”などを表す場合もある。このように，漁業を中心とする生産の空間だけでなく，交通路の空間として海を動態的に捉えることが求められている。いまこそ「海“の”歴史地理」から脱却した「海“からの”歴史地理」を発信し，それが発展することを期待したい。

（立命館大学）